

天沼小だより



校長 大里 忠弘

読み聞かせはまだまだ有効

青く澄み渡った空を背に、山の木々も色づき気持ちの良い日が続いています。スポーツの秋、食欲の秋、読書の秋などと言われますが、最近本を読まれましたか。お子さんたちは本を読んでいますか。

お子さんが小さい頃、読み聞かせをした親御さんもおられるでしょう。でも、子どもが小学校に上がったとたん、「もう小学生なのだから、本は自分で読みなさい」と、自立させようとしてしまうお父さんやお母さんがよくいます。

親は、子どもに早く自分ひとりで読めるようにとさせたがります。いつまでも読み聞かせをしていると、自分で読むようにならないと思っているからです。しかし、決してそんなことはありません。自分で読む読書は目から入る読書で、読み聞かせによる読書は耳から入る読書です。耳から入る言葉が増えれば増えるほど、目から入る言葉の理解も深まります。

読書の本質は、言葉が実感を持って読まれることです。読み聞かせによって言葉の持つ実感を育てているからこそ、子どもが自分で読むときも実感を持って読めるようになるのです。

文字だけの言葉は、それだけでは味気ない記号のようなものです。親が読み聞かせで読む言葉は、そのリズムの中に生きた人間の理解や感情が乗っているのです。子どもの理解や感情が育ちます。

読み聞かせをすればするほど、自分で読む力がついてくるのです。

小学校前半の時期は、ちょうど読み聞かせから自分で読む時期への移行期です。移行期だからこそ、たっぷり読み聞かせを続けてあげることが大事なのです。

子どもは、読み聞かせとともに、親と親密なコミュニケーションを楽しんでいます。自分で読むことができるようになって、読んでもらうことはまた別の喜びがあります。

読み聞かせが必要な時期は、あとから振り返ればほんのわずかです。大きくなってからは、取り戻すことができないのが読み聞かせです。

期間限定の親子のふれ合い

読み聞かせが行われるようになったのは近代になってからのことです。それまでは、本も手に入れにくかったでしょうし、夜中に電灯をつけることもできませんでした。電灯が発明される前に読み聞かせの代わりになっていたものは、昔話など語り聞かせでした。子どもを寝かしつけながら、親は毎晩のように桃太郎や浦島太郎を話して聞かせました。そして、多くの場合、親が先に退屈して寝てしまったのです。その同じ話を、子どもは毎日飽きずに聞いていました。決して、「桃太郎はもうあらすじがわかっているから、別の新しい話をして」などとは言いませんでした。

現代の読み聞かせも、基本は同じです。子どもは、親とのふれあいや本とのふれあいを楽しんでいます。新しいテレビ番組を見るようなことは期待していません。同じ本を何度も読みたがる子がいるのはむしろ自然です。新しい本を読むおもしろさももちろんありますが、同じ本を繰り返し読んでもらった方が安心できるという面もあるからです。

同じ本を繰り返し読んでいると、子どもがその本の文章を覚えてしまうことがあります。それくらいに繰り返し読んで慣れ親しんだ言葉は、確実にその子の実感を育てています。

『小学校最初の3年間で本当にさせたい勉強』（中根克明著）から

